

漂流民の最初の出会いにおけるコミュニケーション行動

稻垣滋子

1. 漂流民の異文化との出会い

江戸時代、日本各地の港から江戸や大阪に物資を運ぶ途中、あるいは帰りの船が、嵐に遭って漂流する事件がかなりの数に及んだ。それらの船の乗組員は、嵐の中で積み荷や船を守り、神仏に祈り、食料や飲み水を僕約し、また漂流中に死亡した仲間を弔うなど、苦難を強いられた。そして幸運な者たちは、異国の浜辺に漂着し、あるいは外国船に救助された。しかし、生き延びたとしても再び日本に帰れなかった者も多い。幸いに帰国できた人々は、幕府の役人の吟味を受け、多くは故郷に帰ることができた。

「漂流記」の形で今日我々が見ることのできる書物は、こうした吟味における、自らの体験や異国の風物などに関することがらの口書が基となっている。これらの書物は、記憶違いや不正確さがあるにしても、外国と接触した人々の貴重な記録を提供してくれるものである。

本稿は、それらの口書を資料として、初めて異文化と接した漂流民がどのようにして意志の疎通を図ったかを探ることを目的としている。異なる習慣を持った相手側の人々に接したときに、それも何の予備知識もなく、生命の危険にさらされており、また助かって帰国できるかどうかともわからないときに、相手からどんな印象を受けたか、そしてどんな言語行動・非言語行動をとったかを知ることは、日本人の異文化接触における行動の一つの型を見ることができるのでないかと考える。

筆者は以前、ロシアに漂着した人々の、ロシア語から訳した日本語の特徴について述べたことがあるが（稻垣 2000）、その中で、日本にない事物は自分の知識にあるものに引きつけて訳す傾向があることがわかった。例えば、ゴンザ、タターリノフ、大黒屋光太夫はいずれも、ロシア正教の神を「ホトケ」ととらえていた。

今回取り上げる史料は、まだそこまで理解の行っていない、異文化との初めての出会いの部分であるが、例えどんなことを恐れるかについても、その感じ方の出発点は、自分の文化、自分の知識を基準としたものであることを示す記録が随所に見られる。それも、今日日本人の異文化に対する態度について論じられているような文化的基盤が、まだ意識されない段階の記録であることは興味深い。

漂流民の場合は、コミュニケーションの基本である、情報の送り手と受け手との間に必要

な「共通の経験領域」のない状態からの出発と言ってよいであろう。

本稿で使用した口書は次の 6 種類である。種々の版本から採録されたものの中で信頼できると思われるもの、またなるべく異なった文化圏の人々と接したものという基準で選んだ。年代は 18 世紀から 19 世紀で、江戸中期から幕末にかけてのものとなっている。

- (1) 李朝朝鮮：『津軽船朝鮮江陵漂着記』(山下 1992 a)
- (2) 唐国：『奥州荒浜南通州漂着始末』(山下 1992 b)
- (3) ミンダナオ島：『南海紀聞』(池田 1968)
- (4) 安南：『安南国漂流物語』(山下 1992 b)
- (5) ロシア『北槎聞略』(亀井・村山 1965)
- (6) アメリカ：『漂流記』(彦藏) (池田 1968)

2. 出会いのコミュニケーション行動

以下に、各地に漂流し帰国した日本人の口書 6 種の中から、異文化との初めての出会いにおけるコミュニケーション行動に関する部分を取り出してみる。6 つの順番は、漂流した時期の古い方からとした。個人名は、乗組員の中の主要人物である。各引用の冒頭に、コミュニケーション行動の型と考えられる事項を記した。

2-1 李朝朝鮮：午之助の場合

陸奥国の治右衛門船は、1758 年に朝鮮江原道江陵に漂着し、乗組員は同年日本に帰国している (『津軽船朝鮮江陵漂着記』山下 1992 a)。

①言葉が通じないため、殺されるのではないかと恐れる。

然れども、山の形何とやらん違ひ候へども、兎角地方へ寄らずしては成り義に存じ奉り、段々走り行き候処、沖中に漁船見かけ候故、これは定めて松前の鮓取り舟と存じ、力を得、この舟を見懸け走り寄り、次第に近寄るに隨ひ、舟の方も違ひ、人身に白き物を着し、頭は黒き物にて包み、帆も二つ掛け在り申し候船も御座候故、何とも合点参らず候へども、先ずこの方より声を掛け候処、先きにても不審にて、何やらん喚き申し候、(中略) その間に、大勢寄り集り申し候て、殊の外騒動申し候故、私共存じ候は、これは我々を殺し候事故と、皆々言葉も通じず、顔容も違い候、この上は是非に及ばざり事と覺悟仕り候、

②のどの渴きを訴えるため、茶碗で水を飲むしぐさをする。

さて又、私共咽呼乾き候に付、水を下され候へと、様々申し候へども、この方より申す詞も通じ申さず候に付き、茶わんを以て、水を呑み候体を見せ候へば、心付き候と相見へ、桶に水を入れ、持ち出し候に付き、銘々四五升ほどづつも給ベ申し候、

③言葉が通じないので、いたわりの行動として粥を持ってくれる。

その後、何方よりもなく、数百人が馳せ参り、色々物を申し候へども、一つも聞へ申さず候、暫く仕り候て、白粥を持参仕り候て、私共へ給べさせ申して、殊の外痛はり候様子に相見へ申し候。

④大切な船往来の扱いについて、相手の身振りから推測する。

その内の唐人三四人、治右衛門が首に懸け候船往来と、着仕り候羽織りを奪ひ取り候に付き、羽織りは構はず候へども、船往来は大切の物故、相渡し申すまじくとせり合ひ申し候内、一人の唐人、治右衛門へ何やらん申し候て、上を指し、又治右衛門が懷を差し教へ候ゆへ、察する処、この往来を所の殿様へ上げ、又私へ返し候事と存じ、相渡し申し候。

⑤漂流中もとどりを切ってあった髪を結うようにとの身振り

右（食事のこと）済み申し候と、私共櫛道具を取り出し候て、髪を結ひ候様に仕形にて教へ候に付き、私共互ひに髪を結ひ候て、見せ申し候。

⑥歓迎の空砲の音に驚き、殺されると思う。

私共馬に乗りながら門内へ入ると、ひとしくから鉄炮を打ち、その音に驚き、一番に乗り候午之助落馬仕り候に付き、跡より参り候三人存じ候は、さては午之助は銃炮にて打殺され、我々もあのごとく殺さるべし、さてさて是非に及ばざる事哉と、観念仕り候て門内に入り候処に、午之助を抱き起し、又馬に乗せ、先へ参り候に付き、皆々夢の心地にて参り候。

⑦言葉が通じず、肉を勧められても辞退できない。

或る日一日、竈炉の前椽側へ、六尺ほどこれある獸を台に載せける、唐人二人にて持ち出し、直し置き申し候、番に付き居り申し候唐人、これを私共に喰べ候様に教へ申し候へども、終にケ様成る獸、給べ候事これ無く候に付き、迷惑仕り、辞退仕り候へども、何分言葉通じ申さず、唐人も合点仕らず、私共へ何哉様々と申し候へども、埒明き申さず候処、一人の唐人、小刀を以て右の獸の毛をこそげ、肉を切り、給べて見せ申し候て、何哉申し候に付き、是非これを喰へと申す事ならん、切害世られて死なんより、この毒を喰ひ死にたる方、幸ひと存じ候間、小刀を取り肉を剪き候時に、唐人仕形にて噉ひ致し、拌み候て給べ候様に、教へ申し候に付き、教へのごとく肉を切り取り給べ候処、その味、はなはだ美味に御座候に付き、毛をこそげ切り取り結べ候事。

⑧日本語を聞き驚く。

外々よりは衣装も宜しく、人体も格別能く見へし候唐人一人、竈炉の戸を開き候て、その方達は、何国の人、何の為めこの所へ参り候哉、と申され候に付き、私共大きに動転仕り、これまで日数の間、幾千人となく大勢参られ候唐人に、日本の詞を申し候者、一人もこれ無く候処に、かくのごとく申し候は、神仏来臨と有がたく存じ奉り、この時初めて人心地申し候故、

2-2 唐国：善十郎らの場合

陸奥国の福吉丸は、漂流中を 1762 年に清国船に救助され、善十郎らは同年帰国した。『奥州荒浜船南通州漂着始末』(山下 1992 b)

①言葉が通じない。

船一艘見かけ候間、悦び招き寄せ候へば、見馴れざる姿に候へども、私共儀、舟御座無き体故、何船成りとも乗り、助命仕りたき旨、願ひ候へども、右唐舟故、言通じ申さず候間、

②風俗

理不尽に右船へ乗込み候所、唐人九人、何れもけし坊主にて、髪長さ三尺ほどこれあり、三ツ組みに仕り罷り在り、木綿縫い詰めぼたん懸けのやうに玉にてメ、股引、沓をはき罷り在り候故、

③親指を出し、身振りで積み荷の米を大切にしてくれるよう頼む。

残し置き候御米を見せ、上乗の者、大指を出し、大切に致しきれ候様に仕方にて頼み候処、唐人共、船に積み置き候土を打棄て呉れ候、右土を帰りに承り候へば、瓦に焼き候土の由に御座候。

④吟味の際、言葉も文字も通じない。唐人はこちらの漢字仮名まじりが読めず、漂流民は相手の漢字が読めない。

役人体の唐人、大勢にて私共吟味致し候様子に候へども、言葉一切通じ申さず候故、した、め候様にと、六寸ほどの丸き硯箱、高さ一寸ほどもこれあり、真中高し、墨は日本の龜物なり、筆も常体の筆を出し候故、仮名まじりに認め見せ候へども、唐人はよめ申さず候、又唐人認め候は、真字ゆへ私共一向読み申さず、互ひに一向見分り申さず。

⑤通詞によりいくらか言葉が通じるようになる。

当月廿日、右寺へ正幸と申す通詞のよし、六十歳余の老人参り、私共へ逢ひ、所を尋ね候故、奥州と申し候へども、合点仕らず候故、上乗心付き、武州江戸と申し聞せ候へば、承知致し、髪、月代仕り候様申し付け、則ち仕り候処、なるほど日本人に候旨、右通詞の詞にて少々通じ申し候。

⑥通詞を通してもわかりにくい。

五月朔日、前事の役所へ呼び出し、諸事承り候へども、通詞にてもとくと相分らず、只承り候と、米の事を重ねて相尋ね、米にて宜しく候哉、かいで宜しく候哉、と申し候故、かにとは金の事と存じ、私も仲間相談仕り候処、米、濡れ米にて持ち帰り候ては用立たず、金と申すも残念には存じ候へども、金の方然るべきと申し合せ、かにの方宜しきと挨拶に及び、帰国仕りたき趣き、仕形をいたし相願ひ候処、唐人共も不便に存じ候様子相見へ、(この後に来た通詞はよく言葉が通じ、帰国の手配が整ったため、早く帰国することができた。)

2-3 ミンダナオ島：孫太郎の場合

1765 年に漂着、現地およびボルネオで奴隸として働かされた後、孫太郎はただ一人生き残って 1771 年に帰国できた。『南海紀聞』（池田 1968）

①人を見かけて呼んだが、相手は立ち去ってしまう。

遙浜辺二人アルヲ見テ、呼ハリケレバ、其人此方ヲ見咎メテ退キサル。

②上陸して初めて会った人々の外見

皆々一処ニ集リ、只茫然トシテ居タル所ニ、少間アリテ、異形ノ人百人バカリ、鳥銃、吹筒、槍、防牌等ヲ提ケ来リ立並ブ。（中略）其状兒面色黝被髮シテ、身ニ短衫ヲ着タリ。其製吹貫ヲ見カ如シ。或ハ裸体ナルモアリテ、孰モ跣足ナリ。

③言葉が通じず、文字を書いても理解されない。

其中ヨリ十四五人進來リ、何ヤラン云ケレトモ、概略モ聞分ラレズ、此方ヨリモ砂上ニ日本ト書示セトモ、彼又解セス。

④空腹であることを身振りで訴える。

此時各々相談シケルハ、ハヤカク成果シ上ハ、我々カ性命モ彼等カ料簡次第ナレハ、無念ナカラ食ヲ乞見ントテ、各々肉ヲナデ、口中ニ指ヲ入テ示シケルハ、曉得テ、時ヲ移サズ蕃諸ノ煮タルヲ十四五斤ホド、藤籃ニ入レ持来リテ与フ。

⑤頭目がいるに違いないと考え、親指を上げて尋ねる。

孰レモ評議シケルハ、此邦トテモ頭目アルベシ。彼等ヲモ頼ミ、頭目ノ居所ニ至ラハ、宜シキ所モアルベシトテ、拇指ヲ拳テ、頭目アリヤト仕形スレハ、合点ユキシト見エテ、西方ヲサス。其処ニツレ行ケトテ、又掌ヲフキ、風帆ノマネセシカバ、点頭シテ、程ナク数人小舟ヲ划来リ、是ニノセ棹サセト仕形ス。孰レモ疲レテ働く力ナシト断シケレハ、黒坊大ニ怒リ、五六人ヲ踢倒シ、拳ヲ奮テ殴擊ス。各々合掌シテ、肢体不自由ナリト一意ニ歎キケレバ、稍ク聞分テ宥シヌ。

⑥髪を見て日本人であることがわかる。

孫太郎等案内ニ任せ、梯子ヲ升リケレバ、頭目ト見エ、椅子ニ踞シタル者三員、其体花布ヲ纏ヒ、臚頭ヲモ花布ニテ包ミ、刀ヲ帶タリ。其内左側ナル老人、金兵衛ガ、髪ニ帙ヲサシ居タルヲ見テ、ヒツポント云タリ。此、初テ日本人ナル事分リシ光景ナリ。

其他ノ言語ハ些モ通ゼス。（以上、通紀上）

⑦仲間の土葬を身振りで願う。

（仲間が死に、水葬にされそうなとき）孫太郎等、又海ニ沈ルニ忍ビス。願ハ土ニ葬リクレヨト仕形スレハ、土地汚ルト云リ。情ナク肯ハス。（中略）後ハ黒坊心得テ、マタイラト云テ、触廻ル故、孰レモ集リ土葬シタリ。

⑧貿易船に乗り合わせた人と、胸を押されて名乗り合う。名前でなく地名で呼ぶ。

其内一人ハ光頭ナリシカ、孫太郎ニ向テ、手ニテ胸腔ヲオサヘ、マニラト名ノル。孫太郎モ又胸腔ヲ押ヘテ、日本ト名ノル。

⑨ボルネオの新しい主人も地名で呼ぶ。

其外、衣衫隨身ノ物件ヲ与エ、名ヲ日本トヨビタリ。

⑩オランダ人が、逃げて来るように身振りで言う。

爾後、商売ニツキ、毎々和蘭館ニ往キシニ、和蘭人動モスレハ、窃カニ孫太郎ヲ招キ、
ジャガタラヨリ三ヶ月ノ内ニ、日本ニ返スペシ。夜間忍ビ出、川ヲ渉テ、此方ニ逃來
レト仕形ニテ勧メケル。

⑪言葉が通じないのをよいことに、挨拶せよとの要求がわからないふりをする。

タイコン官合掌シテ礼拝ス。吏人等、孫太郎ニモ頻リニ合掌セヨト云。孫太郎ハ解セ
サル体ニテ吃糞的、我何ユエニ黒坊ヲ拝センヤト、観面ニ云ケレトモ素ヨリ言語通ゼ
ザレバ、咎メサリシトナン。

⑫次第に唐の国の言葉も現地語も覚える。

サテ、孫太郎、タイコン官カ家ニ仕ル事凡七年、初ノホドハ言語通シカタク、仕形ニ
テ弁シケレバ、甚不自由ナリシニ、後ハ漸々ニ唐山人黒坊ノ言語モ、当然ノ事ハ大抵
覚エシ故サシテ艱苦モナカリキ。(中略) 孫太郎実ハ孤ナレトモ、辞ヲ作り、時々傍人
ニ対し、

⑬両親に会いたい気持ちを、親指と小指を使って示す。

願ハ一 故郷ニ皈り、両親ニ対面シ、安心サセナバ、日本長崎ハ、唐山船和蘭船モ、
年々往来する故、再ヒ此国ニ来リ奉公スペシト云テ、拇指ヲ拳、小指ヲ添テ歎キシニ
ソ、闔家皆其志ヲ感シケル。(以上、通紀中)

2-4 安南（ベトナム）：庄兵衛の場合

1765年に漂着し、1767年に帰国した。『安南國漂流物語』（山下 1992 b）

①漁船がいるが姿を消してしまう。

西南の方に陸山見へし候ゆへ、大きによろこび、地方え近付け候処、魚船一艘、付け
人床しく存じ、高声に呼たく候へども、飢ゑ疲れ声立ち申さず、苦躊を取りて招き候
へども、力御座なく、足立ち兼ね、たびたび倒れ申し候体に御座候、魚船も我々共の
船をみて、おどろき候様子に、忽ち見うしなひ申し候、

②風俗

里人ども七八十人、てんでんに竹鎗、山刀を持ち揃へ、一同に汀に、惣がみにて歯黒
く、いづれも何か赤き物を喰ひ候体にて、口の両脇に汁のつきよごれ、おそろしき有
様ゆへ、両人大きに驚き候へども、兎角遁れざる命と覚悟仕り、たとへ鬼なりとも、
にげ帰るべき心御座無く候ゆへ、

③言葉が通じないが、楷書の漢字は理解される。

庄兵衛、日本水戸国と砂に書き見せ候へば、本の字、不審のやうに相見へ候間、本の
字、真に書き替へ候へば、合点いたし候様子にて御座候、

④飢えていることを身振りと漢字で知らせる。

はなはだ飢へに及び候間、食事を与へ賜り候様にと仕形にて知らせ、先よりも色々言語いたし候へども、一切知れ申さず候ゆへ、庄兵衛は舟え帰り、その次第をしらせ、左平太、十三郎も陸え上り、米といふ字を砂に書き見せ候へば、早速に米四升ばかり持ち来り申し候、悉く飢へ申し候ゆへに、四人とも打寄り、一握りづ、かみ申し候、又一握りと手かけ候へば、里人ども手をおさへ、米は腹にあたり候間、飯に焚き候て喰ひ候様にと仕形をいたし候間、我々も又、舟中に両人居り候へば、そのものに給べさせ申したきよし、仕方にて知らせ、舟へ持ち行き、少々づ、嚼ませ、残りをも飯に焚かせ申し候、

⑤取り調べられるが言葉が通じない

後々は処の役人らしき家え引き出され、問語いたし候へども、少しも通じ申さず候間、

⑥日本語のできる南京の人と会う。

その内に、南京のこくくわんさんと申すもの成りとて、日本言葉を遣ひもの語り仕り候間、我々も床敷存じ、日本え帰り申すべき便りを問ひ申し候へば、こゝろ安き事成りとて、我々を役所え連れ立ち、役人と物語りして立ち帰り申し候、

2-5 ロシア：大黒屋光太夫の場合

1783年、カムチャツカの東のアムチトカ島に漂着、首都ペテルブルグで女帝より帰国の許しを得、アダム・ラクスマンの率いる船で1792年に帰国した。『北槎聞略』卷二（亀井・村山 1965）

①現地人に初めて会ったときの印象。人とも鬼とも見分けがたい。

兎角する間に、此方の船を見かけ、鳴人等十一人、何れも被髪にて鬚短く面色赤黒く跣足にて、鳥の羽を綴りたる膝のかくるるばかりなる衣を着、棒のさきに雁を四五羽宛結着たるをうちかたげ、山の腰を伝ひ来り磯ぎはにて出合たるに、人とも鬼とも更に弁じがたし。

②相手の言っていることが全くわからない。そこで人間共通の欲心があると判断する。

何やらん言かくれども一向に言語通せず、光太夫思ふやう、彼等も人類にて性情殊なる事なくば慾心あるべし、慾心だにあるほどならば、如何様にも志の達せざる事はあるましきと、まづ試に錢を四五個あたへ見るに心よく受たる故、木綿をとり出したあゆれば、悦たる躰にてこれをうけ近々と寄て光太夫が袖を引、こなたへ来れといふ躰也。

③習慣の違いに驚く。歓迎の空砲、肩を撫で、背をさすること。

島人のあとに従ひ、半里計行て山の顛にかゝれば、向の方に以前の島人とは抜群の容儀にて緋哆囉呢の服を着たる者兩人、鳥銃を携へ立居たりしが、五人の者を見るより空砲を放し故、いつれも肝を消したるに、近々とより来て五人の者の肩を撫、背をさ

すりいたはる躰にて、言語はいさゝかも通ぜされとも、こなたへ来るべしといふさまなれば、島人もろとも打連て峠を越れば、はや北の海浜一面に見えわたれど人家とては一軒も見えず。

④口をさし腹をたたいて空腹を訴える。

兎角する内に、日もたけ空腹になりける故、口を指さし腹をたたきて見せければ、一尺計なる魚を草に裹みて潮蒸にしたるを、戸板のごとき盤にすゑ、何やらん白酒のごとき汁を木の鉢にもり、木の匕を添て与へける。

⑤身の危険を感じるが、手を合わせて拝み、心配ないことがわかる。

食事をはれば、磯吉、新蔵二人を残し、庄蔵、小市、清七を魯西亞人五人にて鎗銃炮を持ってとりかこみ、始の道とは引かへて、西の方に山手へ連行故、磯吉おもふ様、始の道とも違ひ、殊に鎗銃炮を持行は、必定山陰に連行、殺害するに極りたりと、かなしさやるかたなく、辻も死する命ならば、是まで一所にありし事なればおなじ所にて死すべしと、新蔵もろとも小屋の口に立出、まてよまでよと喚返せば、三人の者もふり返りふり返り躊躇を、追付て引戻さんと駆出せば、残りし魯西亞人とも立寄て引とむる。此躰を見て先に立し者ども、三人を引連て立戻りしが、頭立て見ゆる者、憤を含みたる面色なれば、(中略。年長の小市が代わりに行くと言って)懇に暇ごひし、今は何方へなりとも連行べしとしかたをし、手を合せ拝みければ、頭立たる者顔色和らき、残りたる二人に向ひ、食指の先を拇指の爪にてきつとおさえ、何やらん言たる躰いさゝかも龐略にはせざるといふ意言外に顕れければ、何となく心もおちつき立別れけり。

⑥「タバコ」を契機に老人と意志が通じる。

食事畢りし頃老人一人来り、タンバコタタといふゆへ、点頭て見せければ、頓て烟草と擂木の如きものを持來、烟草の内に削りませ、木にて造りたる烟管を添て出しける。(中略)以前の老人皮の衣を持來り、寝よといふ仕かたをなしける故、件の皮衣を其まゝ、うち被て臥たりしが月ころ日頃の疲にて、前後もしらず熟睡しけり。(中略)舟場に行度よしをいへども、もとより言語通ぜねば、さまざまに仕形にて舟場の方を指さしなどして見せければ、会とくせしにや点頭ける故、二人うちつれ立出しが、

⑦文字を書いても通じない。

光太夫ニビヂモフに向へ、文字をかき見せけれども、一円に読得ざる躰にて、彼方よりもいろいろ書て見すれども、是又此方に一向通ぜず。

⑧身振りによる問答。船の来る日のこと。

光太夫等は、此地に来りてはや二月余にもなりけれども、一円に言語も通ぜず。されどもニビヂモフ等が此地の人ならぬ事は著しければ、其もと達の迎の船はいつ頃来るぞといふ心を、船をさす仕かた、或は手にて帆の形をなしなどして見せければ、其意を会得せしにや白圏を二十四かき、其上に半月の形を見せける故、皆々うちより判ぜ

し者もありて、何となく廿四日立て船の來ると判ずせし者あり、または二十四ヶ月と判せし者もありて、

⑨初めて言葉が通じる。「これは何か」をきっかけとして。

此嶋に半年余居けれども、とかくに言語通ぜざりしが、魯西亞人等、おりおりに、漂人等が衣服ちようど見ては、エトチョワといふ事、耳にとまりける。是はほしきといふにや、よきあしきといふにや、または笑ふにやと、其心を得ざりしに、磯吉思ふやう、何れにもこなたよりもいふて見ば分る事もあらんと、をりふし側に鍋の有けるをゆびさして、エトチョワといひければ、コチョウと答へける故、さては何ぞと問事よと心得て、夫よりは聞ままに書記しける程に、言語もよほどおぼえ、少しの事は弁ずる様に成けるまゝ、手を束ねて徒に月日を送らんよりはと、嶋人にうちまぢり、ナキリイシ、ナッキスカ、チュク、ウニヤキなどいふ島々に渡り、海獲を捕る手伝をなしで糊口し居けるが、やうやう言葉も通る様になりて、その許たちの乗来りし船はいかが成たるやとたづねけるに、本国よりのせ来りし者共を此辺の島々へ夫々に手撥し、ガマンドルスカといふ嶋え皮革をとりあつめに行ってとゞまり居ると答へける。

2-6 アメリカ：彦藏の場合

1850 年、大太平洋上でアメリカ船に救助される。1859 年に帰国した。『漂流記』（池田 1968）

①異国の船を大声で呼んだのが聞こえる。

曙七時、水主壱人舟の表に出て神を拝しゐる所に、遙に白く見えたるを、帆影にてもあらんかと思ひ、歓来り、寝入りたるもの迄起したて、かくと告。よつて皆々出てなかめながら、色々と評するうちに、次第に近寄を見れば慥に船なり。されと何国の舟たるを知らす。水主のうち壱人、長崎にゆきて蘭舟を見たる者ありて、これ蘭舟ならん。爰を以て考ふれば、我舟異国近く漂流したるならむと云。六半時になりて我舟より二町はかりへたり、すてに行過んとす。船中のもの大音にて助よと呼ふも有り、又端舟にて追付助けを乞んと立さはくもの有り。異人推察せしものか、今迄東に向ひ走りたる船、西方にむきを替え、まきりとなして舟を止たり、皆々悦び、端舟を卸し、衣類調度をつみのせ、又米をも積んとおもへとも、重きもの故心にまかせす。僅に是を積うちに、異人手しなにて物を捨て、はやく乗うつれと云に依て、残りなく異舟に移り、生のあるものは猫壱匹をのみのこせり。

②手を合わせて助けを乞うたところ、相手は飲む形、食べる形を見せて安心させる。

異船乗組の内壱人威儀ある人出て来て礼をなす。此とき舟頭始我輩皆々頭を下け手を合て助けを乞ふと云仕形をなしたるに、異人我船頭の手を握て水に指し、呑む形ちをなし、又舟底に指し食するまねをなして、飲食のことには気遣ふなど示す。五十日の間、生死の事のみに心をいため怨みたるに、今如斯懇切なる異人の救を得て、一同の

恰悦いはむかたなし。異人自分の居間に我々をともなひ、舟中には何を積るや、貨幣を残せるかと尋ねるさまなる故に、舟中に物有と答しに、風波はけしく、端舟の進退自由ならず。朝五時より九時迄待とも、風波しつまらず、是非なく積荷のまゝ舟を捨て、異船帆を揚、東をさして走る。其駿速なる事驚くに堪たり。我等心におもふやう、舟かくのことくはやし、黄昏には何れの国へか着せんと、頼もしく思ふばかりにて、言語通せざる故に否をも問もなさす。されと心ならぬ故に、舵取の傍に行て、いつ頃着岸すべきかと、手品そして問ふに、舵取指を折て四十五六日有て着岸すべきといふ。

③食物の名前「ハン」

翌朝起出たるに、異人鶏卵のゆてたると「ハン」をくれし故に、其玉子をとり食せんとすれば、みなみなまゆてなり。

④地名を教えられ、推察する。一方言葉が通じないため疑心が起こる。

異船第三の役人、地球の図をひらき、手真似指さして、此船は亞米利加船にて、支那より亞米利加「キヤリホウナイ」といふ所へ帰国する舟なるを示し、我等其あらましを推察す。夫より図中国々の名を教へ、みゆる程の嶋々指さし、「フーチ」と言嶋人は、愚にして人道をしらす。或時は人を食すること有等のもの語をなす。是を聞いて、永く時日をへるうちに、若糧尽なは我々も食とせらる、ならんなど、異人の心をしらされは、無益の心痛をなしたり。我々異舟に移りしより、食物の習れに違ふて迷惑せんことを察して、魚肉野菜の類は生にて呉れ、米は我らか持たるをかしき用ひ、忽て深切のことにて、差支はなけれど、只言語の通せざる故に、何かと疑起り安き心はなかりし。

⑤上陸地で、互いに珍しく思う。たばこをくれたりし、親切なことがわかる。

此舟の水主、未日本人を見たる事なく、我等も又、彼等を見る事始てなる故に、互に珍らしく、言語通せざるによつて、其情を詳かにせずといへども、或は懷中より嗜煙草叉は小刀其他持合の品を呉れ、或は見せなとするとふ。其情至つて懇切なるを察するに足れり。

⑥初めての挨拶「ハワヤ」「グーバイ」

老人は舟中に止り、其余は皆陸に帰り、残りたる老人と我舟の頭と何か話を推察するに、我々のうゑを語るかことし。夫より我等が側に三人来りて手を握りハワヤといふ。此言葉か、はいやといふに似て、うれしきこゝちしたり。後に聞は、如何かくらすかといふ英語なり。次第に亞人の深意を知り疑念はれ安心す。是はしめて英語と聞とめたり。グーバイといふは、汝に神が添て守りますると云意なり。

⑦不愉快な思いをするが、言葉がまだ通じないため抗議できない。

亞国は、人を憐れむを道の第一と勤るうちにも、又かゝる不義の人もありけり。

⑧次第に言葉を覚える。

此舟に居ること十二ヶ月、日曜日には舟将人に命して、我々を逍遙せしむ。此舟に在

る間に、漸々言葉を覚へ、凡用便するに至る。

3. 出会いのコミュニケーション行動の類型

前節で取り上げた 6 種類の資料を整理してみると、漂流民が異文化と初めて出会ったときに何をどう感じたか、そしてどんなコミュニケーション行動をとったかについて、次のような特徴が抽出できる。それらを相手側のコミュニケーション行動とともに述べていきたい。

3-1 言葉が通じない段階

(1) 相手の外見からの印象

資料の 2 か所に、「鬼」という表現が見える。安南②では、里人たちが竹槍や山刀を持ち、赤いもの（実は果物であった）を食べながらやってきたのを見て、たとえ鬼だったとしても逃げ帰る気持ちはないと言っている。またロシア①では、漂着した島の住民が人とも鬼とも見分けがつかないと言っている。この「鬼」について、小林 (2000) は、村井 (1988) を引用しながら、古代・中世において、国家の領域外の人々はしばしば、「鬼」と認識されており、疫病をもたらす存在であったと述べている (pp.214-215)。上記 2 か所の表現は、こうした認識が根底にあったことを示していると考えてよいであろう。

その他の印象では、髪型や服装が異なる（朝鮮①と唐国②）、「異形の」人々（ミンダナオ②）、本稿には挙げなかったがロシア人の外見など、自分達と異なる外見から、遠く流されてきたことを実感したことが想像される。

一方、相手側がこちらを日本人だと判断した基準に髪型がある。嵐のまっただ中では、もとどりを切って神仏に祈るのが普通だった。そのため漂着したときや救助されたときはざんばら髪であったはずである。朝鮮⑤で、相手が髪を結うように身振りで示したのはそういう意味であろう。ミンダナオ⑥では、髪に帙子をさしたのを見てヒッポン（日本）と判断している。

(2) 習慣の違いから来る恐れや疑心と、理解したあとの安堵感

自らの習慣と違うやり方に出会ったとき、そして特にそれが鉄砲など武器を用いたものであるとき、漂流民たちは殺されるのではないかと恐れたことが資料から読みとれる。

朝鮮⑥では、鉄砲の音が聞こえたとき、先に出かけた仲間が殺されたと勘違いし、大変恐れた。同様にロシア③でも、鉄砲の音に肝をつぶしたとある。歓迎の空砲をこのように受け取ったのであるが、すぐ後で、朝鮮の方は仲間が無事であることがわかり、ロシアの方は抱擁してくれたことから安堵した模様がよくわかる。

その他習慣の違いは食物にも見られる。例えば朝鮮⑦では、肉を勧められて辞退したいのに表現できず、殺されるよりは毒を食べて死ぬ方がよいと思い、相手のやるように切って食べてみたら美味であったという。

また、アメリカ④では、船中でフィジーの話を聞き、この船でも食料がなくなったら我々も食べられてしまうのではないかと恐れたが、一方で、日本人のために魚や野菜を生で食べさせてくれたことに感謝もしている。疑心と安堵の間で気持ちが揺れ動いていたさまがよくわかる。

アメリカの場合は、良い印象に傾いていくのであるが、⑦のように不愉快な思いをすると、その印象が損なわれることもあったようである。

(3) 訴えたい・お願いしたいときの身振り

漂流民は、命を助けてもらいたい、食物がほしい、水が飲みたい、故国に帰りたいなどさまざまな要求をしなければならない。このとき言葉が通じなければ、身振りで表すことになる。

まず助けてくださいと言いたいときは、ロシア⑦では、相手が怒ったので手を合わせて押むと、相手は指で丸を作つてみせて安心させてくれた。相手が怒ったという記述はミンダナオ⑤にもあり、この場合も合掌して許してもらっている。アメリカ②では、合掌して助けを乞うと、相手は飲む形や食べる形を見せて安心させてくれている。

次に水を飲みたいとき、朝鮮②では、茶碗で水を飲むしぐさをすると、相手は桶に水を入れて持ってきてくれた。食物を乞うときには、ミンダナオ④では銘々が胸や腹をなで、口の中に指を入れて見せたところ、諸の煮たのを持ってきてくれた。ロシア④では、口を指さし腹をたたいて見せると、魚の蒸したのと汁をくれた。これらに対して安南④では、身振りでなく、砂の上に「米」という漢字を書いたところ、米を持ってきてくれ、さらに生では腹にあたるので炊いて食べるようになると身振りで勧めた。

そのほかでは、指を使った例が見える。唐国③では、船の上で、親指を出し、米を大切にしてくれよう頼むと、瓦用に積んであった土を捨ててくれる。ミンダナオ⑬では、両親に会いたいと、親指を立て、小指を添わせて頼む気持ちを理解してくれた。またミンダナオ⑤では、頭目に会いたい旨を親指を立てるやりかたで表現している。

このように、現地の人々は略奪を行つたり怒つたりする一方で、頼みに対して応えてくれる場面が随所に見られる。

(4) 推測して判断したこと

ロシア②では、漂着直後で言葉が全く通じないとき、光太夫は人間一般に共通だと思われる「欲心」に着目し、現地人に物を与えている。この推測は当たっていて、現地人は漂流民たちをロシア人のところに連れて行き、島での生活が始まったのである。

また朝鮮④では、大切な船往来を取り上げられたときに、相手の身振りから、いったんは殿様に見せてその後返してくれることを察し、安心した。そのほかミンダナオ⑤では、支配

者がいるに違いないと推測し、先に述べたように身振りで伝えて連れて行ってもらった。

ここに挙げた例では、推測はどの社会にもあることを示す結果となって有効に働いたが、それが現地の常識と異なった場合には、上で散見されたような摩擦が起こってくるのであろう。

ただし、漂流民が、外国の知識を全く持っていないかったかというと、特に幕末期には少しずつ外国のことも知られるようになっていたと思われる。例えばアメリカ①では、漂流民の中に長崎でオランダ船を見た者があって、アメリカ船を見てあれはオランダ船だと言ったことは、西洋の船に共通の特徴を見い出したからであろう。

3-2 言語を使ってのコミュニケーション行動

記録を見ると、言語を使って意志を通じさせるのには3通りあったことがわかる。それは、通訳がいる場合、共通の文字を持っている場合、そして漂流民自身が相手方の言葉を覚えることである。以下にそれらの例を挙げてみる。

(1) 通訳がいる場合

通訳もしくは日本語のできる人物が登場するのは朝鮮⑧、唐国⑤⑥、安南⑥である。日本語に出会えたことは、漂流民にとって大変な驚きであり喜びであったであろう。ただし唐国では初め、通訳はあまり役に立たなかった模様である。

ここには取り上げなかっただが、ロシアでは、光太夫が漂着する前にすでに、漂流民によって日本語教育が行われていた（稻垣 2000）。光太夫が帰国する際に日本との通商を開く任を負ってやってきたアダム・ラクスマン一行にも通訳がついていた。しかし光太夫自身は、日本語のできる人物に会う前にすでにロシア語が使えるようになっていたので、通訳を介してのコミュニケーションはほとんどなかったと思われる。

(2) 共通の文字を持っている場合

漢字は、日本と中国で共通のものであったし、上に記したように、安南④では「米」という字が役立った。また安南③では、「日本」と楷書で書いたら通じたという。ただし、唐国④のように、漂流民は仮名、現地では漢字、というように、共通項のない場合もあった。今回取り上げた資料では、漢字の効用は半々であった。

(3) 漂流民自身が相手方の言葉を覚えた場合

今回扱った資料の中で、漂流民が相手国の言葉を覚え、有効に使ったのはロシアとアメリカの場合である。ロシア⑨では、「エトチョワ」（これは何か）という表現を知ったことで、飛躍的に語彙が増え、やがて言葉によるコミュニケーションがとれるようになっていった。

光太夫は、アダムの父キリル・ラクスマンの研究を助けるまでになったという。一方、アメリカに行った彦蔵は、救助された船にいる間から徐々に英語を覚え、のちにアメリカで教育を受け、働き、帰化する過程で実力を蓄えたようである。帰国後、アメリカ滞在経験と英語力を役立てたことは有名である。

おわりに

以上、6種類の漂流記を資料として、漂流民が異国の人々に初めて出会った際のコミュニケーション行動についての記録をたどってみた。彼等のコミュニケーションは、相手の出方によって異なるところもあるが、全体としては、見知らぬ人達への驚きと恐れから出発していると言える。Langacker (1994) は、Cyclic Model (循環モデル) において、文化の知覚は最初は心理面で行われると述べているが、この漂流民の場合はその一例と言ってよい。漂流民たちは、特に言葉が通じない時期に意志を通じさせなければならぬため、命を助けてもらいたいこと、空腹、のどの渴き、帰国への願望などを必死に身振りによって表現し、文字が通じる場合はそれも使い、相手方の言葉を覚えて使ったことなどを、それぞれの漂流記から読み取ることができる。日本では外国船打払令が出され（1825年）、やがて廃止され（1842年）、そして開国に向けて社会が動き始めるころまで、多くの漂流民が環太平洋地域を中心として存在した。

各種漂流記は、鎖国時代の日本から世界に出て行った人々が、見聞した海外の事情を日本に伝えたものであり、同時に、自分の知っている日本の枠を超えるを得ないときの生き方の一端を見せてくれるものである。

本稿では、地域を限定し、それも1国に1例を取り上げたにすぎない。今後、同一地域への複数の事例の調査、地域間の共通点と相違点の確認を、一次資料の調査を含めて進めていきたい。

池田浩編 (1968) 『日本庶民生活史料』第5巻、三一書房

稻垣滋子 (2000) 「18世紀ロシアのキリスト教に接した漂流民の記述の特徴」『アジア文化研究』26、

ICU アジア文化研究所

小林茂文 (2000) 『ニッポン人異国漂流記』小学館

村井章介 (1988) 「中世日本の国際意識・序説」『アジアの中の中世日本』校倉書房

山下恒夫再編 (1992a) 『石井研堂これくしょん 江戸漂流記総集』第1巻、日本評論社

山下恒夫再編 (1992b) 『石井研堂これくしょん 江戸漂流記総集』第2巻、日本評論社

桂川甫周著、亀井高孝・村山七郎編・解説 (1965) 『北槎聞略』吉川弘文館

R.W.Langacker (1994) "Culture, cognition and grammar", edited by Martin Pütz *Language Contact, Language Conflict*, John Benjamins Publishing Company.